

4000万人の頭痛

86

頭痛にまつわる都市伝説

第6回 く梅干しばあさんは頭痛持ち？

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

今ではあまり見かけなくなりましたが、私が子供の頃、こめかみに梅干しの皮を小さくちぎって貼り付けているおばあさんを見かけました。聞くところによると、この通称、梅干しばあさんは頭痛もちで、梅干しを痛いところに貼り付けることで痛みが緩和することでした。

この梅干しを貼ると痛みが軽減するという都市伝説に、果たして医学的根拠はあるのでしょうか？このシリーズ第5回でも述べた通り、年を取り脳血管の動脈硬化が促進すると片頭痛は起こりにくくなるので、果たして本当に頭痛の軽減のために梅干しを貼っていたのかという素朴な疑問も生じます。

しかし、頭痛発作時の痛みに対して、更に強い痛み刺激を与えることで、元の痛みを感じにくくする、痛み慣れさせるという減感作療法という治療法が過去に欧米でも行われていたのです。群発頭痛という連日連夜、あたかも火箸で片目の奥をえぐられるような激烈な痛みに襲われる頭痛発作に対して、痛みが起るのと同側の鼻の穴に、唐辛子から抽出したカプサイシンという刺激液を綿棒にしみこませ挿入し、激烈な刺激を与え、群発頭痛の痛みにも

耐えられるような手段を講じていた時代もあったのです。

現代ではスマトリプタンという注射剤で痛みが即座に消失するのでこのような治療はほとんど行われていません。こう考えると梅干しをこめかみに張り付けることは、ヒリヒリとした刺激を頭皮に常時与え続けることで本来の頭痛をあまり感じなくさせるという一種の減感作療法であったのかもしれない。

他にも頭痛を軽減するためにその昔、密かに医療従事者の間で行われていた不思議な治療法がありました。これは本来、狭心症や心筋梗塞などの虚血性心疾患の治療で用いられていたニトログリセリンをしみ込ませた胸部に貼るべきテープをごく小さく切断し、肩に貼ることで肩こりや緊張型頭痛が改善するというものでした。血管拡張作用のあるニトログリセリンが虚血に陥った筋肉内の血管を拡張して血行を良くするという理屈によるもので、病棟の夜勤で疲れた看護師さんがよく貼っているのを見かけたものでした。しかしこのニトログリセリンは局所に留まっていれば、結果、全身の血管が広がり

血圧が低下したり、また血管拡張が原因の片頭痛持ちでは頭痛発作が誘発されることもありま

す。もちろん適応外でもあることから絶対に行ってはいけない荒療治であったと考えられます。梅干しやこのニトログリセリンなどは、適切な頭痛治療法が確立されていなかった時代の苦肉の策であったといえるでしょう。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。『頭痛女子のトリセツ』（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平
新紀元社 (1,080円(税込))販売中。